

## 道草の多い育ち、遠回りの子育て、心根に子育て文化を

越田 理恵

金沢市福祉健康局 金沢市保健所

「あ～あ、やっと今日も終わった！」

友達と時間を忘れて外で遊んでいた夕暮れ時、母が迎えに来てくれた。「さあ、夜ごはんの準備もできたし、そろそろお家に帰ろう。」と。つないだ手のぬくもりと、茜色に染まる空、今にして思えば胸がキュンとなる小学生時代の、何気ない一日の終わり。あの頃、時間はとてもゆっくり流れていたように思う。

振り返って今、「えっ、今日もうこんな時間！」

時間は、万人平等のはずだが、あっという間に一日が過ぎていく。自分の子育て時期を思い起こしても、恥ずかしながら夕焼けを見ながら手をつないで家路へといった記憶は殆どない。昨年末、里帰りしていた長女がふと、こんなことを話した。「小学校の頃は、熱を出すといつもお母さんに悪いなと思っていたんだよ。」って。目にうっすらと涙を浮かべながら語る娘に、取り返しのつかないことをしてしまったと落ち込んだ。そんな私に子育ての話をする資格はない。しかし、この街金沢で、子育てができたことは幸いだった。

今年3月、北陸新幹線開業10周年イベントで、JR金沢駅では、小学校の鼓笛隊が金沢市長が奏でるフルートと一緒に楽しげに演奏、見守るご父兄や地域の方々からの大きな声援と拍手を浴びて、こども達は満面の笑みで応えていた。その足で訪れた21世紀美術館では「金沢アート工房」の作品展が開催されていた。知的・精神的障害のある方々の優れた芸術的才能を支えてきた活動は20年近く続けられており、金沢の街が文化の芽を大切に育ててきた証に感じられた。

翌日は、久しぶりに石川県ジュニアオーケストラの演奏会へ。設立以来約30年、オーケストラ・アンサンブル金沢のメンバーによる指導の下、時にはビックな演奏家の金沢公演の隙間時間に直接ご指導いただいていた。我が家のこども達も小学校4年生からこのオーケストラに参加し、五嶋みどりや、世界的な指揮者サイモン・ラトルのタクトで演奏した経験は、まさに一生の宝である。

その他、お琴や三味線、市の無形文化財「加賀宝生」の教室では、能楽、狂言、謡などを学び発表の機会が設けられている。また、市内の一流料亭やレストランの料理人の方々から指導を受ける食文化・食育事業、等々。この街には、こども達を「本物の文化・芸術」に触れさせる風土が静かに根付いている。

近年、様々な領域でAIの導入が進んでおり、私も、先日遅ればせながらChatGPTを使ってみた。確かに優れモノで、多様な情報に迅速にアクセスでき、「調べる」という泥臭い作業過程をスキップして、それなりの成果品を手にすることができる。情報過多の昨今、短時間かつ最小限の労力で的確な情報を収集し、間違いのない答えを出す。しかし、こども達の世界にまでこれが普及していくことに、ふと不安になった。こどもの時代こそ、結論を急がず、ゆっくり夕焼けを眺める「寄り道」の時間が大切ではないかと。加えて、現行の教育現場では得難い、またAIの提供する画一的な産物には敵わない本物の芸術に触れる機会をこども達に提供することは、生涯こどもの心に残るかけがいのない一生モノのギフトに通じるのではないか。

以前、ある小児科医のことは何かで読んだことがある。「自分の子育ては孫の育ちによって評価される。」と。現在、子育て中の我が家のこどもたちは、それぞれの家庭で多くの時間をこども（私にとっては孫）と共に過ごしている様である。そんな姿を見ながら、どこかほっとしながらも、反面教師の母親はやっぱり心の中で「ごめんね。」とつぶやいている。